

ドイツ人も、日本人のように、天候には非常に敏感である。ドイツ人を日本人と対比させて、前者を狩猟民族、後者を農耕民族だと論じるのはどうか。ドイツは、北方の北海とバルト海で海に面する一方、東・南・西方は、平野と山岳地に囲まれているから狩猟民族と見られているのだろうか。ドイツは今日、世界4大農産物輸出国の

ゲルマン民族の伝承

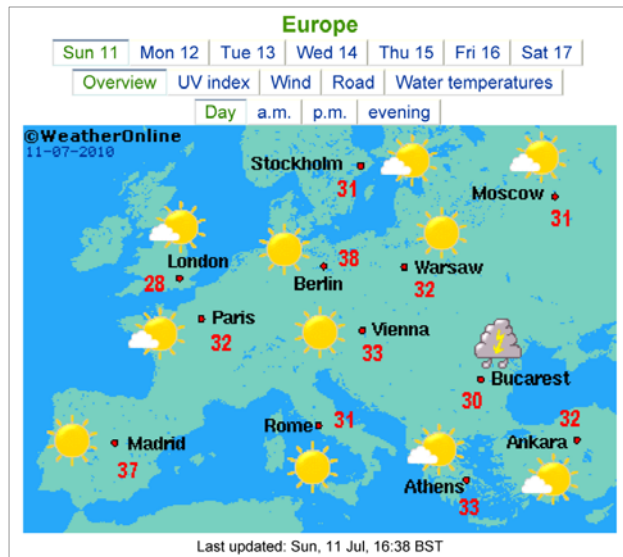
## 「6月27日、快晴」

欧州自動車市場情報  
論説委員

Brigitte M. Katsuta

とも多神教国家であった。ローマ皇帝トラヤヌス・デキウス (Trajanus Decius 在位 249-251) は、ローマの古代の宗教を復興しようとし、キリスト教徒に組織的な弾圧を加えた。ギリシャの都市エフェソス(現在のトルコ西岸)で、7人の敬虔なキリスト教徒が迫害を逃れ、近くの洞窟に身を隠した。皇帝デキウスは、その洞窟の入り

口を埋めた。7人の殉教者は約200年間眠り続けたと伝えられている。奇跡が起こり、眠りから覚めて復活。その間、キリスト教は380年、ローマ帝国の国教と宣言され、392年には帝国内の異教信仰が禁止され、ローマ帝国の国教に昇格された。ローマ帝国は476年滅亡したが、ゲルマン民族は中世、神聖ローマ帝国の守護者を自認し、「ジーベンシュレーファーの日」を祝ってきた。現在、その風習が農民の間に生き続けており、天気を占う(賭ける)習わしとして、生活に根差した「お百姓の知恵」となった。



万種を超える農産品を供給している。ドイツは農業大国でもある。

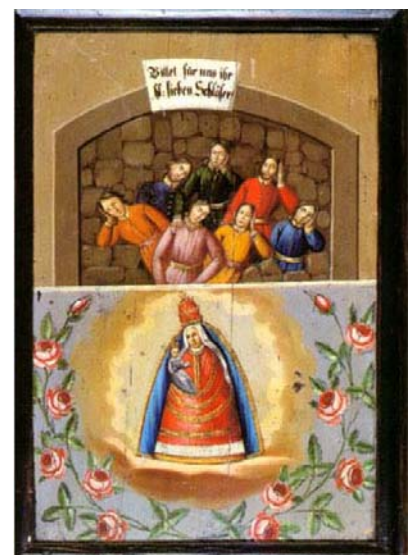
昨日7月11日(日曜日)、ウェブサイト weather online (写真/上) が報じたように、ヨーロッパ全域で気温が、摂氏 30° を超えた。パリ(32°)、ベルリン(38°)、ウィーン(33°)、モスクワ(31°)。ドイツでは過去2週間というもの、雨らしい雨がでない。今年は、冬が特に長かった。夏の到来で、1929 年来の酷暑との報道も出始めた。

ドイツでは、農民の伝承として、6月27日は「ジーベンシュレーファー」(Siebenschlaefer<sup>1</sup>=眠れる7殉教者の日)と呼ばれている。この日の天気が、7週間続くといわれる。雨なら、以降7週間にわたり雨か雨模様の天気が続く。快晴なら、8月中旬まで好天続きとなるというもの。今年6月26日と27日、ドイツは全域で快晴、気温は正午前に軽く 30° を超えた。歴史の舞台は3世紀に遡る。ローマ帝国はも

口を埋めた。7人の殉教者は約200年間眠り続けたと伝えられている。奇跡が起こり、眠りから覚めて復活。その間、キリスト教は380年、ローマ帝国の国教と宣言され、392年には帝国内の異教信仰が禁止され、ローマ帝国の国教に昇格された。ローマ帝国は476年滅亡したが、ゲルマン民族は中世、神聖ローマ帝国の守護者を自認し、「ジーベンシュレーファーの日」を祝ってきた。現在、その風習が農民の間に生き続けており、天気を占う(賭ける)習わしとして、生活に根差した「お百姓の知恵」となった。

皮肉にも、7月初旬に、好天到来を喜んだお百姓が今、雨乞いでもしかねない様子である。ドイツの夏には雷雨がつきものだが、進路を急変したり、途中で消滅したり、竜巻とヒョウを伴って大暴れしたりするので、慈雨としてあまり当てにならない。このまま、雨が降らないと、散水では間に合わない。地下水のないところでは、干ばつや、森林火災が心配されている。

「眠れる7殉教者」と「聖母マリア」をモチーフに描いた珍しい絵画(19世紀作; 写真右)が、デュッセルドルフの隣町ノイスにある。Clemens-Sels-Museum(クレメンツ・ゼルト博物館)所蔵。なお、ジーベンシュレーファーは、日本でヤマネ(山鼠)と訳されているが、ドイツでは「眠れる7殉教者の日」を指すのが普通だ。



<sup>1</sup> 独語で「ジーベン」(sieben)は数字の7。「シュレーファー」(Schlaefer)は動詞 schlafen「シュラーフェン」(眠る)から派生し「眠れる人々」の意味。

## ゲルマン民族の伝承: 「6月27日 快晴」

ドイツ人も、日本人のように、天候には非常に敏感である。ドイツ人を日本人と対比させて、前者を狩猟民族、後者を農耕民族だと論じるのはどうか。ドイツは、北方の北海とバルト海で海に面する一方、東・南・西方は、平野と山岳地に囲まれているから狩猟民族と見られているのだろうか。ドイツは今日、世界4大農産物輸出国のひとつで、農業・食品産業はドイツで第5位の輸出産業に成長している。3,000を越える輸出企業が10万種を超える農産品を供給している。ドイツは農業大国でもある。

昨日7月11日(日曜日)、ウェブサイト weather online (写真/上) が報じたように、ヨーロッパ全域で気温が、摂氏30°を超えた。パリ(32°)、ベルリン(38°)、ウィーン(33°)、モスクワ(31°)。ドイツでは過去2週間というもの、雨らしい雨が降らない。今年は、冬が特に長かった。夏の到来で、1929年来の酷暑との報道も出始めた。

ドイツでは、農民の伝承として、7月27日は「ジーベンシュレーファー」(Siebenschlafer =眠れる7殉教者の日)と呼ばれている。この日の天気が、7週間続くといわれる。雨なら、以降7週間にわたり雨か雨模様の天気が続く。快晴なら、8月中旬まで好天続きとなるというもの。今年6月26日と27日、ドイツは全域で快晴、気温は正午前に軽く30°を超えた。歴史の舞台は3世紀に遡る。ローマ帝国はもともと多神教国家であった。ローマ皇帝トラヤヌス・デキウス(Trajanus Decius 在位249-251)は、ローマの古代の宗教を復興しようとし、キリスト教徒に組織的な弾圧を加えた。ギリシャの都市エフェソス(現在のトルコ西岸)で、7人の敬虔なキリスト教徒が迫害を逃れ、近くの洞窟に身を隠した。皇帝デキウスは、その洞窟の入り口を埋めた。7人の殉教者は約200年間眠り続けたと伝えられている。奇跡が起こり、眠りから覚めて復活。その間、キリスト教は380年、ローマ帝国の国教と宣言され、392年には帝国内の異教信仰が禁止され、ローマ帝国の国教に昇格された。ローマ帝国は476年滅亡したが、ゲルマン民族は中世、神聖ローマ帝国の守護者を自認し、「ジーベンシュレーファーの日」を祝ってきた。現在、その風習が農民の間に生き続けており、天気を占う(賭ける)習わしとして、生活に根差した「お百姓の知恵」となった。

皮肉にも、7月初旬に、好天到来を喜んだお百姓が今、雨乞いでもしかねない様子である。ドイツの夏には雷雨がつきものだが、進路を急変したり、途中で消滅したり、竜巻とヒョウを伴って大暴れしたりするので、慈雨としてあまり当てにならない。このまま、雨が降らないと、散水では間に合わない。地下水のないところでは、干ばつや、森林火災が心配されている。

「眠れる7殉教者」と「聖母マリア」をモチーフに描いた珍しい絵画(19世紀作; 写真右)が、デュッセルドルフの隣町ノイスにある。Clemens-Sels-Museum(クレメンツ・ゼルト博物館)所蔵。なお、ジーベンシュレーファーは、日本でヤマネ(山鼠)と訳されているが、ドイツでは「眠れる7殉教者の日」を指すのが普通だ。欧州自動車市場情報 論説委員 Brigitte M. Katsuta